

くじら日記

太地町立博物館から



大きくクリッとした目、筋骨隆々の体格、そしてほかの個体との接触や生活でできる白い傷痕が花びらにも見える独特の模様がひと際目立つのは、オスのハナゴンドウ「シロ」です。

今年で飼育20周年を迎えました。ここで暮らすどのクジラよりも、またお世話をするどの飼育スタッフよりも、くじらの博物館を長く見てきた大先輩です。多少のことでは動じない堂々たる振る舞いは、他のクジラたちからも一目置かれているように見えます。

「シロ」が当館に来たのは2001(平成13)年1月のこと。体長約260センチでまだ若いクジラでしたが、ハナゴンドウの成長とともに増える白い傷痕が当時からくっきりと体に現れていたことが、名前の由来になったそうです。

飼育20年迎えた「シロ」



白い傷痕がシンボルマークのハナゴンドウ「シロ」＝太地町立くじらの博物館

2007(平成19)年に初公開として活躍しました。特に、開いたクジラショーでは、立ち高く飛び、空中で体をひねらち上げ当時から主力メンバー。せて、豪快な水しぶきとともに

に着水するサイドジャンプは圧巻で、多くの人を魅了したに違いありません。

2008(平成20)年から開催した「くじらに出会える海水浴場」では、2シーズンにわたり、来場者にパフォーマンスを披露したり、遊泳客とふれあったりして、太地の夏をにぎわしました。同年には初めて父親になり、当館で暮らすハナゴンドウの社会にとって欠かせない存在となりました。

2011(平成23)年の七夕イベント「くじらに願いを★くじらの博物館があなたの夢をかなえます」では、お客さまから寄せられた「シロの背びれにつかまって泳ぎたい」という願いを、苦手だった水中訓練を克服して見事かなえました。好評であったため、2013(平成25)年からは「ふれあいスイム」

(現在、新型コロナウイルス感染症防止対策のため中止中)として、体験プログラム化されました。

2021(令和3)年の現在、「シロ」はくじらの博物館から少し離れた場所でも暮らしています。クジラの学術研究の拠点として、太地町が注力する「森浦湾くじらの海」です。

約28万平方メートルという、飼育環境としては類を見ない広大な海域で、今後は、レクリエーションに限らず、繁殖や行動の研究でも活躍する予定です。

くじらの博物館や、くじらの町・太地における鯨類飼育に協力してきた「シロ」に敬意を表します。「森浦湾くじらの海」という新天地での活躍にも期待が高まります。

(太地町立くじらの博物館 副館長 稲森大樹)

新天地「森浦湾」での活躍期待